

## おおふなやま たいしゅうじ 大船山と大舟寺 (波豆川)

標高六五三メートルある大船山は、波豆川はづかちや高平の谷のどこから見ても威厳のある山だ。

この山には、いく人もものえらいお坊さんが、船に乗ってやってきて、修行をしたそう。

なかでも日羅上人にちらしやうじんは、この山で修行を続け、雨つゆをしのご小屋を建てた。それを「舟寺」といい、大舟寺の始まりと伝えられている。そしてこの山が「舟山」※と言われるようになったという。

今も大舟寺には「大舟山 沙門空海」と刻んだ石柱が残されている。空海つまり弘法大師さんも船に乗ってやってきたのかも……。

そんな話を伝え聞いた人たちは、きっとあの辺りが波打ち際で、あの大きな松に止めたんだと、いろいろ想像したのだろう。だから、だいたい登ったところにある松が「舟着き松」と名づけられたのかもしれない。

やがて、大舟寺へ参拝する人が多くなってきた。いくつものお堂が建てられた。室町時代には、山の上の寺までの

道のりを示す町石ちやうせき※が参道に立てられるほどになった。

今でも登山道のかたわらに町石が残っている。それぞれには、山の上の寺までの距離とお地蔵さまのお姿が刻まれている。お地蔵様は登っていく人たちを見守ってくださいているのだろう。

ところが、全国を統一しようとする織田の軍勢が登ってきて、大舟寺のほとんどが焼かれてしまった。

その後、再建されたものの、参拝者が少なくなり、大舟寺がさびれていった。長い間、だれもお寺を守るお坊さんがいないことが続いたようだ。それに、霧が深く湿気しつげが多いせいもあって、建物がひどく痛んでしまった。

そこで別伝和尚べつでんおしょうが村人と相談して、寺を波豆川の里に下ろすことにした。延宝五年えんぽう（一六七七）に新しい大舟寺を建て、みんなでお守りするようになった。

境内には、大きなカヤの木※がある。そのカヤの木は、本堂の屋根の上にも枝を広げるぐらい大きな木だ。高さ約二十メートル、根回り約八メートルにもなる。根本の少し上から幹が三つに分かれて立ち上がっているの、「三宝のカヤ」と呼ばれている。寺の宝だ。このカヤの木は、樹齢じゆれいが三百年とも五百年とも言われている。波豆川の里に

大舟寺が下りてくる前から、この地にしっかり根を張っていたのだらう。

大きなカヤの木の周りには、子どもたちも集まってきた。みんなでどこまで登れるか競い合ったりして、よく遊んだものらしい。

年末になると、このカヤの実をとって配ったそうだ。波豆川の家々では、それをお餅と一緒に三方さんほうにのせてお供えし、正月を迎えたのだった。家中が「わいわいがやがや」と賑やかになるようにとの願いを込めたんだ。

※舟山の表記について：現在の地図上の表記は大船山となっています。

※町石：十三基の町石があり、兵庫県重要文化財に指定されています。

※カヤの木：兵庫県指定天然記念物

